

房総の戦国大名 里見氏



房総半島南端の館山平野を見わたせる丘陵地には、戦国時代に房総で最も勢力があったという大名里見氏の中心の城であった稲村城跡があります。1996年、城跡に市道建設が計画されて破壊されそうになり、貴重な文化遺産を守ろうと市民運動がおきました。以後17年にわたって保存と史跡へ指定するようにはたらきかけた結果、稲村城跡（館山市）と岡本城跡（南房総市）の里見氏城跡は2012年に国が指定する史跡となりました。

戦国時代に房総里見氏登場

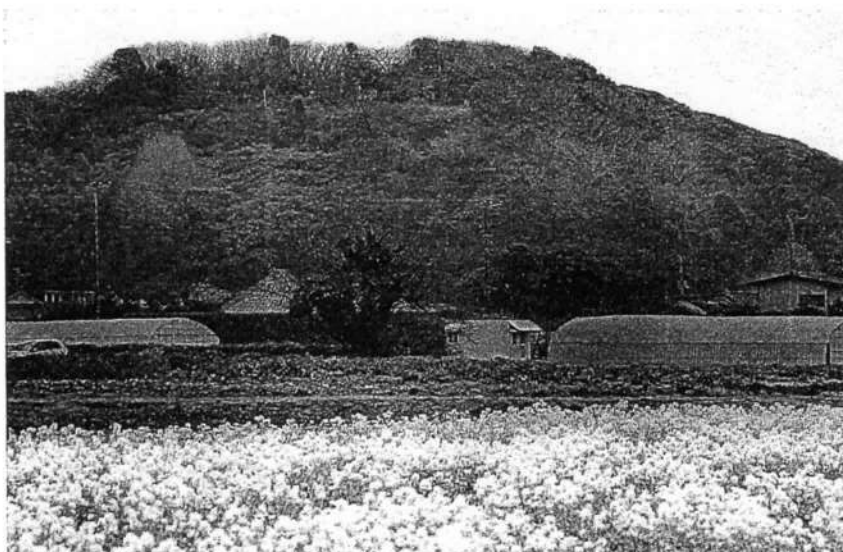
房総を代表する戦国大名里見氏は、江戸時代の長編小説『南総里見八犬伝』に登場し、その名が知られるようになりました。いまの群馬県にあった里見郷に住んでいたことで、里見という苗字になったと伝えられます。いまも群馬県榛名山南側の高崎市の地域には、上里見・中里見・下里見という地名があります。戦国時代に房総にあらわれた里見氏とは、どのような大名であったのでしょうか。

15世紀中ごろ、鎌倉公方と呼ばれ室町幕府から関東の支配をまかされていた足利氏と、それ

を支える立場にあった関東管領の上杉氏は、支配権をめぐる対立していました。ふたつの勢力が武力衝突したとき、里見氏は、鎌倉公方側において大きな役割をはたしていました。1454年の戦いは「享徳の乱」と呼ばれていますが、関東地方を東西に二分する大争乱として、関東における戦国時代の幕開けのできごとになりました。

房総里見氏の祖であった里見義実、このころに鎌倉公方の命令で安房の地に送りこまれ、勢力を広げていく戦いをすすめました。上杉氏がにぎる交易の中心地は白浜の湊（南房総市）で、海から攻めたと思われます。白浜を足場に館山平野に進出した里見義実は、安房の中心地である国府を見下ろす稲村城を本城にしました。

この稲村城では、のちに「天文の内乱」と呼ばれる本家と分家とが争う戦いがあり、江戸湾で争っていた北条氏を巻きこむ大きな主導権争いになっていきました。この争いで勝った分家が里見氏をひきつぎ、これ以後の発展をつくりました。



稲村城跡（標高64メートル）

して江戸湾をはさんでの里見氏と北条氏の40年にわたる長い戦いは、終わりを告げたのです。

平和になった江戸湾では海上交易が活発になっていきました。里見氏と北条氏はともに和平外交のなかで国力を高めました。しかし、北条氏は上杉謙信などと戦い関東支配を広げていったものの、最後は全国支配を進めていた豊臣秀吉との戦いに敗れ滅びました。

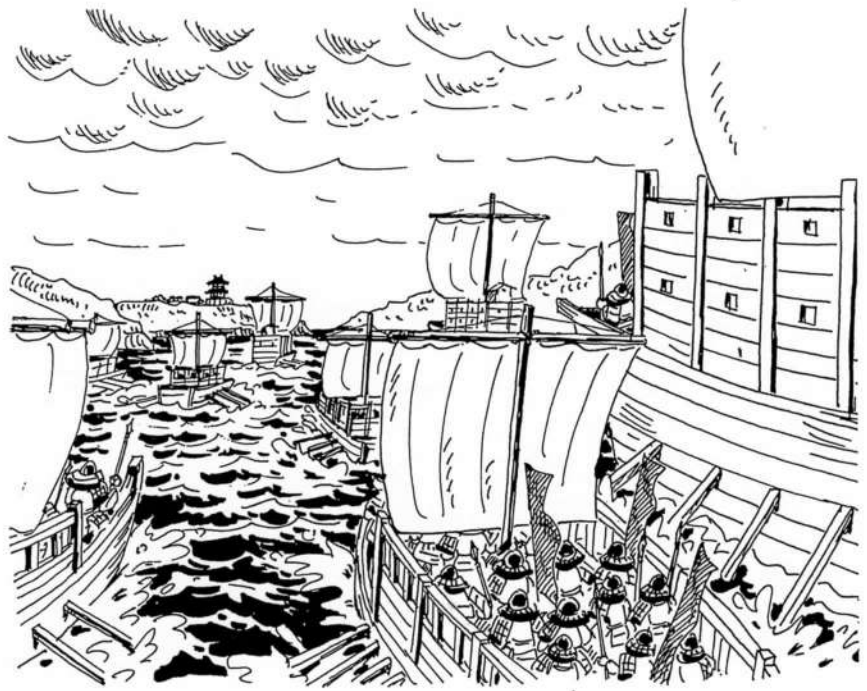
一方、里見氏は豊臣秀吉から上総国にあった領地を没収され、安房国へのみの支配となってしまいました。そこで里見氏は、支配の中心を江戸湾入口の館山に移し、館山城をつくり、多くの商人を城下町に集めました。近くの高の島に湊をつくり、江戸湾の海上交易の中心地とする国づくりをはじめたのです。

里見氏の歴史と『南総里見八犬伝』

里見氏は、関ヶ原の合戦で徳川側として働き、家康から3万石を増やされて、関東では最大の12万石の外様大名になりました。しかし、3年後に藩主の義康は31歳という若さで亡くなり、わずか10歳の子義が、里見家を相続しました。さらに里見氏に悲劇が襲いかかりました。



読本『南総里見八犬伝』に描かれた里見義実(右奥)



1614年、いまの鳥取県である伯耆国に突然領地をかえられます。江戸湾の入り口という軍事的に重要な拠点の館山を支配し、しかも強力な水軍をもっていた外様大名の里見氏でしたが、幕府から許可をえないで城を改修したとか、きまりより多くの武士をかかえているなどと口実をつけられ、国替えされたのでした。20年あまり住んだ館山城はこわされ、堀は埋められました。

藩主の里見忠義は、気を落とし1622年に病気になって、29歳という若さで亡くなってしまいました。そのときに、数名の家臣が藩主のあとを追って自害したと伝えられています。

こうして房総半島南部の安房国は、江戸幕府が直接支配していく地になっていきました。

江戸時代後期の作家である滝沢馬琴は、長編物語の『南総里見八犬伝』を創作しました。物語であるにもかかわらず、人びとは『南総里見八犬伝』を里見氏の本当の歴史だと思いました。

1990年代になり、稲村城跡保存運動によって地域史研究が進み、さまざまな文化活動が広がった結果、ようやく歴史的な事実が人びとに語られ、房総の里見氏の歴史が知られるようになってきました。(愛沢伸雄)